こんな本
あんな本

「風景との対話」

東山魁夷著
（新潮社）

井上直子

東山魁夷氏は、現在の日本画に代表される第一人者の一人でいらっしゃる。氏の絵への讃美者は、私の知っている限りでも実に多い。日本画の中に洋画の要素をたくみにとり入れた独特な描法と画風、風景を象徴の世界にまで高め、深く見る人の心をつかみ、見る人の心を広げてくれる独自な世界の存在、あのなんともいえない快い色調の変化……。

「風景との対話」は、なぜこのようなすばらしい作品が出来上がってきたのか、一つ一つの作品の成り立ちをとおして、氏の美を求める心のプロセスを浮きぼりにしようとした随筆集である。

私がこの本をはじめて読んだのは、この本が出版された年の夏だったと思う。絵から受ける感銘以上に、氏のお人柄にふれた喜びでいっぱいになった。チャンスがあれば、なるべく見にいく日展であったが、この年の秋の日展がまちどうしく、氏の一枚の小さな絵をどうしても見たくて、上野の美術館へいそいだことを思い出す。

静かに坦々として語られていく文章から、ある時は氏の絵を見るような気分に、ある時は物知りな哲学者と対話しているような気分に、ある時は文学者の美しいことばの調べに酔わされているような気分になっている自分に気がつく。豊かにはぐくまれる人間の心は、自然界から受ける恩恵がなんと大きいことか、それを受けとめられる人間の敏感な心は、なんと深いことか、また、そのみのりには、形にならない長い時の流れ、悶々とした広い空間がいかに必要なことかを、筆者は体験をとおして教えてくれている。

本著は、「風景開眼」の第一章から「永遠の海」までの二十三章からなり、風景画へ志を立ててからの氏自身の心の遍歴を、絵の製作の実践をとおして見つめようとしている。

「いったい、生きるということは何だろうか。—略—

私は私の意志で生れてきたわけではな

く、また、死ぬということも私の意志ではないだろう。こうして、いま、生きているというのも、はっきり意志が働いて生きているわけでもないようだ。したがって絵を描くということも――　―略―

私は生かされている。野の草と同じである。路傍の小石とも同じである。生かされているという宿命の中で、せいいっぱい生きたいと思っている。せいいっぱい生きるなどということは難かしいことだが、生かされているという認識によって、いくらか救われる。

私の生き方は、こんなふうに、あまり威勢の良いほうではない。生来の性格の上に、多くの挫折と苦悩を経て辿りついた結果である。幼い時から青年期まで病気がちであった。物心のつく頃から、両親の愛憎の姿を、人間の宿命とも、業とも見てきた。外面にあらわそうとしない私の心の深淵。精神の形成される時期のはげしい動揺。兄弟の若い死。父の家業の倒産。芸術の上での長い苦しい模索。戦争の悲惨。

しかし、私の場合は、こんなふうだったから生の輝きというものを、私なりにつかむことが出来たのかもしれない。私が倒れたままになってしまわずに、どうにか、いろんな苦しみに耐え得たのは、意志の強さとか、それに伴う努力というような積極的なものよりも、一切の存在に対しての肯定的な態度が、いつの間にか私の精神生活の根底になっていたからではないだろうか。」

第一章は、このように、氏の生きる姿勢を中心に、自分自身の気持の開眼とともに風景を見る目がかれていくプロセスを掘りさげている。何の説明も要すまい。もう少し、文章を追ってみよう。

「私は一年の大半を人気のない高原に立って、空の色、山の姿、草木の息吹きを、じっと見守っていた時がある。

―略―

あの時分、どうして私の作品は冴えなかったのだろうか。あんなにも密接に自然の心と溶け合い、表面的な観察でなく、かなり深いところへ到達していたはずである。それなのに、私の感じとったものを、すなおに心こまやかに描くことが出来なかった。表現の技術が拙かったのだろうか。いや、それよりも、もっと大切な問題があった。―略―

私は汗と埃にまみれて走っていた。…

私は酔ったような気持で走っていた。魂を震撼させられた者の陶酔とでもいうべきものであろう。つい、さっき、私は見たのだ。輝く生命の姿を――」

題材の特異性や、構図や色彩や技法の新しい工夫などに気持が先ばしり、家族からの負担からくる人の注目を引きたい、世の中に早く出たいとはやまる気持が筆者の心を純粋にしてくれなかった。それが、戦争という渦の中にまきこまれ、絵を描くことへの望みはおろか、生

きる希望も無くしていた時に突然感じたのだ。

「あの風景が輝いて見えたのは、私に絵を描く望みも無くなったからである。私の心が、この上もなく純粋になっていたからである。死を身近に、はっきりと意識する時に、生の姿が強く心に映ったのにちがいない。」

そして、この感動を純粋なこの気持で描ける時がきたら描こうと自分にちかうのである。

第二章では、筆者が、自然に心から親しみ、深く深く観察している文章がダイナミックで美しい。そのするどい美に対する観察眼はたぐいまれなものであろう。章頭にかかげられている「残照」という絵が出来上がるまでの貴重な時間の流れが、筆者のおいたちの回想からうかがわれる。

九十九谷を見渡す山の上に立ち、広潤な眺望をながめているといろいろなことが思い出される。

父母のこと、兄弟のこと、その中での自分の存在、次々に亡くなっていく身内の悲しい死……。

「間もなく、母の骨を納めたばかりの墓に弟のも納め、もう、これで私の喜びをいちばん親身になって喜び、私の悲しみを最も深く悲しんでくれる肉親はひとりもいなくなったことを思った。家族といえば、いよいよ妻と私の二人きりになってしまった。まだ住む処も定まらないありさまだった。私はこの時、どん底にいた。だが、もうこれ以上落ちようがないと思うと、かえって気持が落着くのを感じた。これからは、少しずつはいあがっていくのだと自分自身にいいきかせた。

—略—

自己を深く見つめ、自然を静かに見つめて、そこに通いあう微妙な響きを画面の上に、きめ細かに描きあらわそうとする態度に向かいつつあった。

—略—

神野寺で数日を過すうち、私は、この風景の上に、いままで私が歩きまわっていた甲信や上越の山々の情景が重なり合い、雄大な構想となって展開されてくるのを感じた。中央のいちばん遠くに、八ヵ岳か妙高の遠望を連想するような山嶺を置き、そこに、夕陽の最後の残映を明かるく与えることによって、漠然としていた構図をひき締めることが出来た。光の明暗と、大気の遠近による諧調、嶺々の稜線が作り出す律動的な重なり合いがこの作品を構成する要素であるが、それによって表わそうと希ったものは、当時の私の心の反映、私の切実な祈り、索寞の極点での自然と自己との緊密な充足感とも云うべきものであった。」

こうして無言の風景と対話しながら、自己の存在をたしかめつつ、一つの絵がつくられていく。

第三章では、日本画への道へ進んだ動

機が語られ、第四章「ひとすじの道」へと続く。

十数年前のスケッチから筆者の心の中に浮かび上がってきた「道」への製作は、画家としての道でもあった。

「道は、歩いてきた方を振り返ってみる時と、これから進んで行こうとする方向に立ち向かう場合がある。私は、これから歩いて行く方向の道を描きたいと思った。—略—

これから歩いてゆく道と思っているうちに、時としては、いままでに辿ってきた道として見ている場合もあった。絶望と希望とが織り交った道、遍歴の果てでもあり、新しく始まる道でもあった。未来への憧憬の道、また過去への郷愁を誘う道にもなった。—略—

私の心の中に、このひとすじの道を歩こうという意志的なものが育ってきて、この作品になったのではないだろうか。いわば、私の心の据え方、その方向というものが、かなりはっきりと定ってきた気がする。やはり、その道は、明るい烈しい陽に照らされた道でも、陰惨な暗い影に包まれた道でもなく、早朝の薄明の中に静かに息づき、坦々として、在るがままに在る、ひとすじの道であった。」

第五章では、戦後の画壇の情勢をかたりながら、筆者が、世間的に認められるようになっていったことが、六、七、八章では、「日本画」と「洋画」、「東洋」と「西洋」といった角度から氏の心の中に形成されてきている「東」と「西」が、考察されている。

第十一章では、筆者を育ててくれた師のこと、十三章では、「光悦」「宗蓮」「光琳」のこと、十六章では、菱田春草、村上華岳、中村岳陵の先輩の画家をとおしての芸術を志す道のきびしさを説く。

そして、北欧へ旅して得た数々の経験と作品が、十九、二十、二十一章で語られる。

のちに「京洛四季」と銘うって発表された京都への慕情と、日本をとりまく「海」のスケッチから発見する新鮮な題材からも、筆者の心のささえになっているのは、やはり、日本の自然と伝統である。……と結ばれている。

ひたむきに努力し、美を追求していく態度、自己を深くみつめていこうとする謙虚な気持、作品が次々に認められていっても変わらない製作への素朴で素直な情熱が、好感をもって伝わってくる。

偉大な画家の内奥の世界を垣間見られ、我々と同じように人間として悩んで、苦しんで、喜んでいるという共感が読む人への生きる糧となることは、まちがいないと思う。（私立大崎幼稚園）